

---

# 異世界最強家族

襲雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界最強家族

### 【Nコード】

N1648J

### 【作者名】

襲雷

### 【あらすじ】

実の父親の死に際し、空河達3兄妹は異世界に飛ばされることに。そこで出会うは、世界最強となる親父と義姉。さまざまな思惑に左右されつつ、3兄妹は成長していく。主人公は最強ではありませんが、家族自体はチート性能。サモンシード一家の戦いが今始まった。

## ブログへ召喚の日へ（前書き）

久しぶりに投稿します。

文章が拙いことは相変わらずですが、見ていただけると幸いです。

お便りいただければさらに僥倖。

よろしくおねがいたします。

## プロローグ 召喚の日

「おにいちゃん、待ってよー」

「早すぎるよー」

「お前らが遅いんだろ、まったくしょうがないな」

公園の日暮れ

3つの人影が伸びている。

3つの影は、小さい影が2つ、それより若干大きい影が1つ2つの影が、1つの影を追いまわしている。

3人がしているのは鬼ごっこ

鬼が小さい影2つ、それに対して逃げているのが1つの影だ。

しかし、年の差もあって、大きな影には、なかなか追いつけない。2つの影は前後から挟もうとするが、それをひらりと逃げてさらに走る。

しかし、先ほどまでより若干速度を落とした事もあり、鬼の手がかかる

「やったー、兄ちゃん捕まえた」

「やったね、美羽」

小さい影達は、お互いの手を取り合い、飛び跳ねあう。

「あーあ、捕まったか、まあそろそろ夕飯の時間だし、帰ろうか」  
対する大きな影は、溜息一つつき、帰宅を促す。

もう辺りは、夜の手が伸びてきており、

先ほどまで遊んでいた近所の子は既に帰途へついている。

公園が家のすぐ隣ともあって、3人はいまだ帰らず遊びの余韻を余すことなく楽しんでいたのだ。

「さんせい、お腹へこぺこだよ」

「私も」

3人は、兄弟妹であり、帰る場所もちろん一緒

兄は2人の顔を見比べるが、顔にほとんど差異がない事を再認識する。

2人は双子、しかも一卵性双生児と呼ばれる、DNA的には同一の2人だ

妹の方が若干髪が長いことを差し引くとほとんど見分けがつかない。

「よし、帰ったらまず手を洗うんだぞからな」

「はい」

完全にハモってるし

「おら、食べ」

「わーい、いっただっきまーす」

ハモって、目の前の料理にがつつく2人

目の前の料理は、愛情こもった母の・・・ではなく兄の料理

簡単な炒め物に、唐揚げ、サラダに煮物

買い物から下ごしらえ、料理全てを兄が担っていた。

これというものこの3兄弟の家庭環境に起因する。

一家の大黒柱たる父親は、3人の食いぶちを稼ぐため、毎日遅くまで働く

一方一家の支えたる母親がいない、父親の話だと、3人の物心つく前に

病死したとのこと。

物心つく前だから、3人に母親の記憶はない。

それに伴い、一番上の兄が、その責任感の強さゆえ幼い時から家事を担当している。

掃除、洗濯は5歳、料理は7歳、単独での買い物は10歳。気が付いたら、立派な主夫と成りあがっていた。

もちろん、家庭の財布は、父親が握っているが、生活に必要な物は全てこの13歳の少年空河に託されていた。

下の兄弟は、いまだ10歳

遊びたい盛りでもあるし、食べ盛りでもある。

しかも2人ともお兄ちゃん子ときた

家事の合間を見ては、今日のように2人や近所の子供達と遊んだり、いろいろと面倒を見たりする。

毎日忙しい日々であるが、それなりに充実している。

そう、その日までは

「可哀そうにねえ、両親とも亡くなられたんでしょ」

「ああ、施設行きは免れないだろうな」

「まったく居眠り運転のダンプに突っ込まれるなんて事故は怖いわね」

主のいない家の葬式

父親は帰りにダンプにひかれ、短い生涯を終えていた

その後、3人を待ち受けていたものは、

世間の荒波であった

葬式切り盛りはさすがに13歳の空河には無理であり、

遠い親戚のつてにてなんとかこなした。

しかし、見返りとしてぼったくりに近い額の遺産を持って行かれた

3人を引き取るうとする親戚もなく

行く末は、施設であり、良くて新しい家族に引き取られるだけであ

ろう。

「おにいちゃん・・僕たちどうなるの・・・」

「私この家から出たくないよ」

震える2人を両手につなぎ、

新しく生活するべく施設へ向かう途中であった

必死に大丈夫だ、兄ちゃんがなんとかしてやると

2人を奮いたたせる。

実は必死に自分に言い聞かせていただけだが

2人の前もあり、怯えに似た感情は、自分の中に抑え込む

「大丈夫だ。俺達3人を受け入れてくれる所はきつとある。

お前たちは何の心配もしなくていいよ」

そう無理やり笑顔で2人に向き合う。

天を仰ぐと心情に呼応したかのように雨が降り始めた

はじめはポツリポツリだったが、次第に土砂降りの雨となった

傘を持っていない3人は雨宿りのため、誰もいない公園の屋根のつ  
いた

ベンチに隠れた。

季節は冬で、凍えるように3人で身を寄せ合う。

下二人は疲れからか寝息を立てている。

その瞬間、

「やあ、こんな所でどうしたのかな」

誰かに呼びかけられた

振り向くと、黒いスーツを身にまとった若い男が立っていた。

手にはステッキ、雨の中、傘もさしていない

髪はオールバックでこぎれいにまとまっている

若い紳士それが彼のイメージであった。

「あなたは・・・誰ですか」

あまりに場違いな紳士に空河は警戒した。

「おお、おおそんな顔で睨んじゃ駄目ですよ

全てに絶望したって顔をしてるね

僕が救ってあげようか？」

微笑と共に話を進める紳士

空河は警戒を強め、声を荒げる

「な、何を言っているんだ、あんた」

クスクスと手を口に当てながら

「簡単さ、3人で暮らせるような世界にご招待しようっていうだけさ

もちろん、ただではないけどね」

「やっぱり、あんた詐欺だろう」

訝しげに睨む空河

父親の葬儀からずるい大人は嫌というほど見てきた

そんな空河が軽い大人不信になりつつあった。

おどけるように紳士は続ける

「いやいや、条件は簡単、今3人の他の全て。

家から、友達、学校、全てにこの世界からさよならまでできるかい？」

「・・・それなら既にないよ、大切なのはこの2人だけ」

そう、家も友達も学校も、父親の死と共に遠くなくなってしまった

「了解したよ、それでは3名さまご招待！」

紳士はわかったとばかりにステッキをクルクル回す

「ま、待つてくれよ、誰もまだ答えは・・・うっ」

ステッキを見ていると次第に気が遠くなる。

「良い旅路を」

最後の紳士の言葉がやけにクリアに聞こえ

3人は意識を失った。

「ここはどこだ・・・」

見渡す限りの森

あの紳士に拉致され、森に置き去りにされたか

「そうだ、2人は!!!？」

見回すと、少し離れたところに2人は倒れていた。

「宗也、美羽!!!」

2人にかけてより、呼吸をしていることを確認し、一息つく。

「よかった。2人とも無事か・・・」

安心すると、気が抜け腰をその場に落とす

落ち着いて、周りを見回すが、見渡す限り森森森

しかもかなりの暑さだ

季節は冬のはずなのに、このうだるような暑さ

おもわず、空河は来ていたダウンジャケットを脱ぐ。

ふと海外まで連れ去られたのかと頭が混乱した。

あの紳士は？売り飛ばされた？では何故ここに置き去り？

考えれば考えるほどわからなくなり頭を抱えた

「ん、おにいちゃん・・・ごっこ」

「おはよう・・・おにいちゃん」

見ると妹の美羽、弟の宗也が起き上がって周りを見回していた。

まだ頭が醒めきっていないのか、混乱する様子はない。

「落ち着いて聞いてくれ・・・どうやら俺らは森に置き去りにされた

らしい

誰にどこに、何でかはわからない・・・

とりあえず人里を探そうと思う。」

「うん、わかった」

「お腹減った・・・」

宗也それは兄ちゃんも一緒だ。

まずは人里を見つけないで、知らない森。どんな動物がいるかわ

かったものじゃない

まだ、朝みたいだが、夜になれば、夜行性の動物がわんさかいるか

もしれない。

明るいうちに安全の確保をしなければ命の危険さえある。

それに水がなければ、1日2日としないうちに脱水症状になるだろう。

動けるうちに動かないといけない状況であった。

2人を両手に従え歩いて行く

森は舗装された道ではなく倒れた木や

又メツた所もあり決して歩きやすい道ではなかった。

それでも、3人は手をつなぎ時にお互いを引っ張り上げながら進む。

しかしそれでも慣れない道、夏のような湿度、温度とも高い熱帯雨林

幼い兄弟の体力を容赦なく奪う

「お、おにいちゃん・喉が渴いた」

目がとろんとし、力なくつぶやく美羽

足取りはふらふらして心もとない。

「そうだな、水が欲しいよな・」

よし、兄ちゃんが探してきてやるからちょっと休んで待ってる

宗也、兄ちゃん戻ってくるまで美羽のこと頼んだぞ」

「うん、任せてよ」

宗也はまだまだ元気そうだ。

座りこみ、寝息を立てる美羽の側で立っていた

顔は同じだが、男の子と女の子なんだなと少し微笑ましくなった。

水を探しに行こうと踵を向けたそのとき、

ガサガサ・

ちょうど弟妹を挟んだ反対側から草をかき分けるような音が響いた

あわてて振り向き、音と2人の間に盾となるよう走りこんだ

「に、兄ちゃん・」

「しっ！音は立てるな」

ガサガサガサ・

かき分ける音は次第に近くなる

これが人か獣か・・・

それによって3人の運命が変わる

祈るような思いで、待っていると

木の影から出てきたのは

2 m近い影

逆光のせいかわ、シルエットしか見えないが

みると頭から角のようなものはやし

毛皮をまとっている

「これは・・・死んだかな」

どう見ても、熊である。

角が生えているのはきつと新種なのだろう

ある日森の中くまさんに出会ったと

現実逃避するように頭の中を動揺がリフレインする。

2人だけは守らなくてはと

2人をキツく抱きしめ

自身もいつくるかわからない衝撃に目をギュツとつむる。

「なんだ、こんなアルカパの森にガキが3人も・・・

おい、大丈夫か、お前ら」

ふと投げかけられた言葉

驚き、振り返ると

2 m近い「熊のような人間」であった。

頭の角も装飾品か、額にくくりつけられていただけ

毛皮は彼の戦利品からはぎ取ったのであるう毛皮のローブであった。

それに安心したせいかわ

「よかった・・死ぬかと思った。」  
目頭が熱くなり、今までの疲れ、気苦労が一気に襲い掛かり  
気を失ったのは本日2度目となった。

「お、おい！死ぬんじゃねえぞ！つたく  
娘と同じの年頃のガキが3人か・・

見捨てるわけにもいかねえし、しょうがねえ、村連れて帰るか・・  
」

困惑した男は3人を脇と肩軽々かつぐと帰途を急ぐのであった。

## 第一話〜いきなり過去の回想〜（前書き）

プロローグと合わせて投稿、

ここまでは、キャラクター紹介を含めます。

次回から本題ですね。

過去話も見たければ、どの話がみたいかご感想いただければ鋭意努力いたします。

## 第一話 いきなり過去の回想

この世界は、シーフィールドという。

文明レベルは、中世時代。貴族、平民とまだまだ階級制度が闊歩し戦争もまだまだ剣による戦闘が主立っていた。

さらに、今までの世界と違ったのは、魔術と呼ばれるいわゆる超能力が人間に備わっていることか

さらに、エルフヤドワーフなどという人間と違った種族が入り混じっていることか

なんともファンタスティックな世界に来てしまったものだと空河は内心溜息をつく。

ベルダイン大陸では、センドリア帝国、アルデバラン王国、シリア王国、コーネリア魔術公国とに分割されている

その中でも、もっとも広い領土をもち、統治しているのがセンドリア帝国である。

大陸の西半分を占め、さらに領土を広げべく隣国の3国に攻め込もうと躍起になっている。

残りの東半分が残りの3国の領土となるのだが、

北からシリア王国、真ん中にアルデバラン王国、南にコーネリア魔術公国となる。

3国は同盟を組み、センドリアの侵攻を正面から対抗している。

むしろそうしないと1国ずつ各個撃破されるのは目に見えるほど

帝国の武力は圧倒的なものであったからだ

その中でも、ここは、ベルダイン大陸、アルデバラン王国領内の西の森

言ってみれば大陸の地理的に中心部となる位置にある

戦士の村と呼ばれる大陸でも有数の戦闘部族が住む村であった。

住んでいる人数は300人に満たないが

位置的にセンドリアの猛攻を受けてもおかしくない場所にいる民族

だが、  
その戦闘能力の高さから、部族一人の命を奪うのに、100人の命を犠牲にする必要があると  
なんとも胡散臭い謳い文句を、言われるほどの戦闘力を持っていた。  
そのため、センドリアといえども無為に力を割くわけにもいかず、  
もっぱら搦め手で部族を懐柔しようとする始末。  
とりあえず、戦争に不干渉ということで、それぞれの国と契約を結んでいた。

何故、ここまで空河が、この世界について詳しくなっただかというところ

「クーガ給仕長！そろそろ飯の準備をしましょうや！」

赤と黒を基調とした露出度の高い服を着た若者が空河に話しかける。

「よし、今日は保存してあるA 5の肉を使うぞ

あと裏の畑からキャルとベキヤを収穫してこい

炒め物にするから、ペッパーも忘れずにな」

戦士の村の給仕長兼裏方のプロとして確固たる地位を獲得しており、異世界への訪問から7年が経過していた。

「調理場家訓！読み上げ始め！」

「1つ！常に清潔に保つべし！」

「1つ！バランスよい食事を保つべし！」

「1つ！食は残すべからず！獲物に感謝を忘れずに！」

「よし！今日もここは戦場となる！腹をすかせた獣どもが

わんさか押し寄せるぞ。食の強さが、我らの強さだ！

奴らを余すことなく満足させてやれ！いいな！」

「サー！マスター！」

「散っ！」

そういうと統制のとれた動きで動き出す調理部隊。

野菜を目にも止まらない速さできざむ者

豪快に燃え上がる火で炒め物を作る者  
作り上げた料理を飢えた獣のような客に運ぶ者

「こりやうめえ！！今日のはなんて料理だ、クーガ！！」

空河がお茶を配りながら、いろんな客に声をかけられる。

「キャロとベキャのニンニク炒めですよ。量はありますから  
がつつり食って、狩ってきてくださいよ」

「たりめえだ！お前さんの料理を食ったら百人力よ  
またいくらでも食材は取ってきてやるからな

そしたらサービスよろしくな」

背中をバンバン叩かれながらも、嬉しそうな顔で客に笑みを返す。

「はいはい、あまり無理だけはしないでくださいよ！

じゃあこれは一つサービス・貸しですよ？」

客に一つ、パンをサービスする。

空河お手製の一品である。

「さすが給仕長！太っ腹だぜ！」

この酒場兼食堂では、戦士の村唯一の大家が集まる場でもあった。

旨い、早い、安い

を实践したこの食堂は、例外なく戦士達に受け入れられ  
常に活気にあふれていた。

ここで働く者たちは10人弱、それに対して、戦士の村は300人弱  
そのほとんどが、この食堂で飯を食うことになるため、

朝昼晩と手が休まるときはほとんどない。

しかし、働くのが10人弱とはいえ、もともと戦闘力に優れた彼ら  
である。

刃物の扱い。火の扱い。勘と覚えの良さは一級品であった。

1人で5人前くらいの働きをするくらい余裕であった。

その中でも、空河は自前の主夫スキルを余すことなく発揮し、

一人で10人前以上の働きをこなしていた。

そして、昼が少し過ぎたあたりで、

「ただいまーおにいちゃん。今日のご飯何？」

「兄貴ーただいまー、肉食わせてくれー」

150cmを少し過ぎたくらいのポニーテールの女の子と

180cmを超え、短髪をツンツンに立たせ

鍛え上げられた肉体の男の子が入ってきた。

2人ともかなり泥っぽく、そこかしこに葉っぱをくっつけている。

よく見ると、服に赤っぽいシミがついているが、もう見慣れた獲物の血の跡だ。

「ソーヤ、ミューー！狩りの後は手を洗ってこいと言っているだろう！

ほら、まずは井戸行って汚れ落としてこい！」

小さいころと全く姿形、雰囲気の変わった弟妹に声を上げる。

「っはっい」

ハモる所は相変わらずだった。

「今日の狩りはどうだった。」

2人に食事を出しながら、戦果を聞くクーガ。

「大漁大漁！今日はガルウルフ3匹と大物のヒプノシスだぜ！

これで、捕獲量は村でもトップじゃねえ？」

興奮冷めやらぬ様子で語る宗也もといソーヤ「サモンシード

小さい頃の美羽と瓜二つの彼は、戦士の村で揉みに揉まれ、

立派な戦士となっていた。

厳しい修練に耐え、激戦を勝ち抜いてきた彼は、

村の中でも、トップクラスの實力を得るまでとなり、

大陸内でも相応の實力者として一目置かれるようになった。

「馬鹿いいなさいよ、1番は父さん、2番は姉さんじゃない

その次が私よ、ソーヤは万年4位。」

そう言つて、胸を張る美羽もといミュー「サモンシード

彼女もソーヤと共に厳しい訓練を超えて、  
戦士として一流となっていた。

さらに、その可愛い容姿から、戦士たちの花として  
戦場をかける戦士達の間では、アイドル扱いであった。

彼女に言いよる男は、数知れず、果ては村を超えてファンがいると  
聞いた時は眉唾ものかと思っただが事実であった。

女の子としては、少々・いやかなり発育不足な所もあるが  
それもまた彼女が可愛いと呼ばれる由縁でもあるだろう。

「まあ、父さんも姉さんも規格外だからねえ」

クーガは、カラカラ笑った。

「ったく、親父に、リテイ姉には、いくらやっても追いつきゃしね  
えな

俺も早く、2人に肩並べたいんだけどなあ」

溜息を付きながらも、クーガお手製の料理をがつつく。

「あら、2人も十分規格外だとおもっけどね

もちろんクーガもね

出来のいい弟妹を持つと、上が苦労するものなのよ

下に抜かれないようにね」

後ろから声をかけられると、つり上がった目を幾分柔らかにした  
美女が立っていた。

「リテイ姉さん!!」

「やつほ。クーガ、私の分もあるかしら？」

歩いてきたのは、俺ら3兄弟を引き取ってくれた人の

娘、シャルリテイ!!サモンシードことリテイ

年はクーガの一つ上の現在21歳

流れるような赤い長髪をアップにしてまとめ

女性らしいメリハリのあるスタイル

特に、ミューと比べ物にならないほどの張り出したバスト

戦士の村の部族衣装ともいえる服は露出が多く

非常に目にやり場に困る。

背中には、双剣を携えており、超一流の戦士として、村のみならず、大陸全土、さらには大陸外にも名が広がるほどの有名人である。

そのため、父親と共に村を離れることも多く、そのたびに名声を高めてくるのであった。

そして今は、3人の義姉である。といってもほとんど血の繋がりが関係ないほど仲睦まじく過ごす彼らであったが。

「もちろんだよ、おーい特定（特別定食）一丁!！」

クーガが声を張り上げると、奥から、大盛りの食事が運ばれてきた。

「これこれ! いったただつきまーす!」

目の前に並べられた暴力ともいえるほどの量を

何のためらいもなく平らげていくリテイ

始めは、その平らげた食事が、このスタイルのどこに入っていくのか驚きに目を見開いていたが、今では、

「この食べっぷりがなきやリテイ姉さんじゃないわよね」

ミューの言葉に3兄妹の気持ちは凝縮されていた。

「さてと・・・腹ごなしも済んだことだしね

クーガが日夜時間あるかい、パパが話したいことがあるってよ」

目の前の食事を、15分とせず平らげたリテイが

片づけをするリテイに話しかける。

「まあ、夕飯後なら、店もひと段落するから大丈夫だよ」

「そうかい、じゃあ一段落したら、パパの部屋行ってよ

なんでも大事な話らしいからねえ」

「なんだろうな・・・収穫祭はこの前終わったしなあ」

考えるクーガにリテイがニヤツと笑うと

「そろそろクーガに嫁でも! って話かもね

あんたもそろそろいい年だからねえ

店も持った一国一城の主だし、ある意味一番の出世頭だよ」

「そんな・・俺なんかにやまだ早いよ！」

それより、姉さんこそどうなんだよ、戦場の戦女神とも言われてるくらいなんだから、いろんな国からラブコールだらけじゃないか」

そうリティはあらゆる戦場を飛び回る戦士であり、

その武力はどの国も喉から手が出るほど欲しい人材である。

さらに、その姿は戦場をかける女神のごとく美しいと聞く。

そんな姿に魅せられた各国の王族、貴族から山になるほどの贈り物が毎日届くのだ。

ミューも人気があるが、リティには及ばない。

「ん〜何だか政略結婚なんて性に合わないらしくてねえ

なんならクーガがもらってくれるかい？」

ニヤツと妖艶な笑みを浮かべつつ、クーガの腕にその豊満な胸を押しつける

「はいはい、姉さんも冗談は胸だけにしてくださいよ」

動じた気配もなく、姉を引き離すクーガ

最初は、驚いていたが、次第に慣れ、今の状態に落ち着いている。

もともと大人じみたクーガにはあまり動揺することがないのだ。

「そりゃ残念、大人になりたいならいつでもいいからね」

ウインクして去っていくリティ

「はあ・・我が姉ながら、まったく・・」

そう言っただけ息をつきながら超高速でテーブル上を片付け、次の客の準備にかかるクーガであった。

「父さん、いますか？」

クーガは、自宅のとある扉をノックし、声をかける。

「クーガか、入れ」

ドアに手をかけ中に入ると、酒の匂いがあふれていた。

「父さん、酒はほどほどにね」

部屋の中央には、トラによく似た獣のなめし皮の上に豪華なテーブルが置いてあり、その上に一升瓶ほどのお酒が

1本置いてあり、床に3本ほど転がっていた

クーガが来るまで、一杯やっていたらしい。

「何言つてやがる、戦士にとって、酒は必需品よ

気持ちを高ぶらせるし、落ち着ける事のできる魔法の水なんだよ」

そういった男は、2m近い体を持ち、髪をオールバックにした無精ひげを生やした

ナイスミドル・・・には程遠い、見た目悪役のような親父。

異世界に飛ばされたその日、3兄妹を拾ってくれた張本人でもある。この大陸最高の剣士と誉れ高い、ガンダルフ「D」サモンシードその人だった。

クーガはいはいと言いながら、ガンダルフの隣に腰かけた。

テーブル上には空の器が置いてあり、クーガ用に用意してくれていたのだろう。

「さて、まずは乾杯だ」

注がれた酒を器を持ったクーガは、

「何に乾杯するの？」

「そうだな・・・お前の20歳記念だ」

「言われてみればそんな歳だね、じゃあ・・・」

「乾杯」

器を合わせ、杯を乾かす。

その後、お互いに酒を注ぎ合う。

「お前たちが来て、もう7年になるか・・・」

「そうだね、父さん達に拾われてこの世界の事を知って

もうそんな経つんだ・・・本当に感謝してるよ」

「辛気臭い事言うんじゃないやねえよ、バカ息子」

父を見ると、うつすら目に涙を浮かべている。

見た目、極悪でも、心根は非常に優しく、情にもろい人だということとは

この7年で嫌というほど知っていい。

拾ってからの日々を思い返しているのだろう。そして、それほどまでにクーガ達3人を慈しんでくれているのだろう。

「お前はホント育てがいがなかったぜ、

最初から大人顔負けの雰囲気、ソーヤとミューをその小さな体で守ってやがる

下手な大人よりも、世界を知っていたしな

しかし、誰よりも努力しても、武術の才はからつきしで、中の下さそれで、最初お前がみんなの手助けをしたいと聞いて、最初は皆笑ったぜ

それが、今やどうだ。お前なしでの村は考えられないほど豊かになった。

戦うしか能がなく奪うことしか知らなかったこの村が豊かに暮らせるようにな

「そんなことないよ、皆が手伝ってくれた。

こんなガキの戯言をしつかり聞いてくれたおかげだよ」

村に来た当時、村は、ある意味傭兵のような山賊のような仕事で生計を立てていた。

しかし、それに異を唱えたのがクーガだった。

まだ10代前半の子供に、その日その日を生き抜く事に精いっぱい戦士達が諭された。

ある意味衝撃だったし、反発も強かった。

戦士達に何度も殺されそうになった。

その度にフォローしてくれたのが、父であるガンダルフと姉のリテイであった。

そのため、まずは、近くで狩られる獣達は殲滅部位を、王国のギルドに

届ける事で、報奨金がもらえることに注目した。殲滅部位さえ届ければ、他の獣の肉、毛皮は余る。

獣の肉は、基本固く、食べれたものではないというのがこの世界での常識であった。

家畜として飼われていた牛や鶏などしか、基本は食卓には並ばない。しかし、獣の各部位の肉を一昼夜煮込む、叩く、寝かせる等、以前の世界で学んだ料理法を

数知れず試した。

するとどうだろう、いままで臭く固く食べれなかった肉が柔らかく旨いものとして生まれ変わった。

香辛料自体は豊富にあったため、味を調えることができた。

今まで食べた事のない肉の旨さに戦士達は舌を巻いた。

クーガ自体の料理の腕にも驚嘆したが、それ以上にこれまで食べられなかった獣が

食糧となることは、それ以上の意味があった。

まずは、村の中で飢えて死ぬことがなくなった。

次に、食事において重要な清潔に保つことに取り組んだ。

口に物を入れる場所は清潔に保つことが求められる。

今までは、狩りをしてきて、泥のついた手で、食事をしてきた彼らだが、

食べるときは、最低でも手を洗う。

もしくは、植物の油を使って作ったクーガお手製の石鹸を使うよう習慣づけをおこなった。

最初は、やはり反発もあったが、試しに始めてみると

今までかかっていた病気が2、3カ月でほとんどなくなったのだ。

もともと体力の強い彼らである。

達の悪いウイルスでもない限り、清潔に保てば、風邪をひくこともほとんどなくなったのだ。

その頃になると、クーガの事を不満に思っていた部族達も

クーガを認めざるを得なくなっており、

クーガもそれに答えるように、さらに活躍をとげる。

食材の長期保存である。

香辛料が豊富にあったのも、クーガ達が最初に降り立ったアルカパの森が

胡椒の実が豊富にとれ、海岸が近いため、岩塩の産地でもあったのだ。

今まで香辛料は、まずい肉を無理やり食べるためだけしか使用されていなかったのだが、

クーガは、胡椒が強い殺菌作用を持ち、自分の世界で長い船旅をする際は胡椒で

長期保存されていたことに注目した。

肉を胡椒を刷り込み、さらに洞窟などの低温の場所で保存する。

それだけで、以前は一週間程度しか賞味期限がなかったものが、

1か月、季節によっては半年程度も保つようになった。

これは、その日暮らしてしかなかった戦士の村で冬を越すのに非常に役に立ったし、

それ以上に、胡椒の輸出する旨味もあった。

技術と共に胡椒を他国に売りつける。

アルカパの森特産の胡椒は、他の地方に出回っていない特別品で、

長期保存が冷凍保存しかなかった世界にてって

食の革命にもなった。

つまり、胡椒が同じ量の金と取引されるのに、

時間がかからなかった。

輸出に伴い、前線に立ったのはクーガである。

年若く老獪な商人に舐められやすい立場であったが、

まだその当時世界最高ではなかったが

大陸指折りの使い手である父親のガンダルフが後ろで睨みをきかせてくれていたおかげで

安く買いたたかれることなく、正当な値段で取引を進めることができた。

この収入は、それぞれの国での国家予算に迫る勢いであったし、当時蛮族としか見られていなかった戦士の村の評判を高めることにもなった。

その後、各国とのパイプが出来上がったころ、  
当時から、有名であったガンダルフ達のもとに  
アルデバラン王国から、救援要請がくることになる。

それは、王国でも手の出しようのない強力な獣の討伐から  
様々な村を荒らす大盗賊団の退治  
多岐にわたっていた。

そして、パイプとしての褒章の交渉を一手に任されたのが  
クーガであった。

時に、退治させられるだけ退治して褒章が出なかったことも  
あり、乗り気じゃなかったガンダルフ達に代わり、

詳細な契約、その当時の王国を相手取って訴訟を起こす事、  
つまり反乱をおこす事も交渉の道具として使いながら  
好条件での仕事をぶんどっていた。

もちろん引き受けた仕事には、ガンダルフやリテイ、  
ソーヤ、ミューそして村の戦士達も機敏に飛び回ってくれ  
さまざまな事件を迅速かつ確実にこなすことに関しては  
戦士の村は一つのブランドとして確立されていた。

特に、サモンシード一家の戦果はすさまじく、各国にその有名が  
徐々に広がっていった。

最終的に、決定づけたのは、センドリア帝国に飛来した1匹のドラ  
ゴン

伝説ともいわれる魔獣の襲来であった。

帝国率いる最強最大の騎士団を持っていしても、ドラゴンを討伐するに至らず

逆に被害が増えるばかりであった。

そこで、当時センドリアの東の辺境伯ロメリアよりお忍びで高名であった

戦士の村に救援を依頼されたのであった。

提示された条件は一国の予算ほどあり、クーガが目をあやしく光らせそれを倍に引き上げていた様子は、ガンダルフでも冷や汗をかいたほどだったという。

依頼を受けたガンダルフ達は、サモンシード一家総出でドラゴン討伐に向かうと

一面焦土となった街々、その中心にいた全長50mほどのドラゴンと対峙することになった。

最初戦った時には、そのかたい外皮にこちらの攻撃は効かず向こうの攻撃により全滅しかけることになる。

しかし、クーガが手製のトウガラシ入りの爆弾をドラゴンに投げつけることで

一命をとりとめ、退却に成功する。

命からがら逃げ伸びたサモンシード一家は、意気消沈し、心が折れかけたが、

クーガが一計を案じることになる。

氷の魔法が得意なミュー、炎の魔法が得意なソーヤ

2人にドラゴンの外皮を急激に冷やした後、温めるつまり熱疲労による

外皮の弱体化をねらったのである。

しかし、長時間かけられるわけもなく、その間の相手は、ガンダルフとリティに任せられるわけである。

できるだけ、ドラゴンを弱らせるため、今度は撒き餌に出る。

牛ほどの大きさの獣のなかに、これでもかというほどの

トウガラシ、胡椒最後に産出されて間もない石油これでもかと込めたのである。

それをドラゴンの目と鼻の先において食わせる。

それにより、ドラゴンが暴れ狂う様子は非常に恐ろしかった。

しかし、荒れ狂って火を吐こうとした時、口の中から腹の石油

まで引火し、体の中で爆発を起こしたのだ、

口から煙状の煙しかださなくなり、大人しくなったところを見計らって

4人は飛び出していき、冷凍、解凍を2人が繰り返す間、

動きの目に見えて悪いドラゴンの相手は2人で十分であった。

そして十数分たったころドラゴンの首からピキピキという音が響き始めた。

その後、ガンダルフの一撃に耐えきれず、ドラゴンの首は落とされた。

ドラゴンの変の終結であった。

その後、各国からガンダルフには、貴族しか与えられない「D」の称号と

世界最高の剣士として勇名を余すことなく、各国に知らしめることになった。

「いままで色々あったがよ、その陰には常に

お前がいたよなあ、世界最強とはこの一家全体で最強だ」

家族になつてからの軌跡を追っているうちに

ガンダルフは既に男泣きに入っていた。

「とりあえずよ、お前この村の長にならねえか？」

泣きながらも急にまじめになった親父様はとんでもないことをおっしゃりました。

「お断りです。」

「今ならリテイもつけるぞ」  
「ずい酒臭い顔を近づけながら迫る」

「冗談は寝てから言ってください」  
と持った酒をガンダルフの口に当て飲ませる  
もちろん睡眠薬を入れるのは忘れない。

「俺はほんひらからら〜・・・バタッ」

ぐああとイビキをかきながら大の字で寝る親父

この人が世界最高ねえ・・・  
そう思いつつも2mの巨漢をなんとかベッドに寝かしつける。

「さて俺も寝るとしようか・・・おやすみ・・・父さん」

何度も笑みを浮かべながら、父親の部屋の扉をゆっくり閉めるのであった。

第二話〜炎剣帝の誓い〜（前書き）

さて急展開。回想が多くてすみません

## 第二話 炎剣帝の誓い

戦士の村の一日は朝の食卓から始まる

今日も朝から、朝礼を始める給仕所

「調理場家訓！読み上げ始め！」

「1つ！常に清潔に保つべし！」

「1つ！バランスよい食事を保つべし！」

「1つ！食は残すべからず！獲物に感謝を忘れずに！」

「よし、今日も朝から獣達が力を求めてやってくる

そいつらに活力を嫌というほど与えて、

殺しても死なないようにしてやるのが俺らの仕事だ！

俺らも殺す勢いで食事に気合入れやがれ！」

「サー！マスター！」

「散っ！」

クーガの気合の一言により、それぞれ持ち場に散っていく。

「相変わらずねえ、仕事の時は人格変わるのどうにかならないの」

「リテイ姉さんいたの？」

気づくと食堂の入口にシャルリテイ＝サモンシードこと

リテイが腕を組んで立っていた。

「昨日は大分深酒したようだねえ、パパがまだいびきをかいて寝ていたよ

何の話だったんだい？」

やばい、睡眠薬の量を間違えたか・・・

まっいつか、殺しても父さん死なないし。

「ただ男同士の酒の飲みただけだったみたいよ」

本題に入らせることなく睡眠薬で圧殺したしな

クーガに村を統治なんて面倒くさいと思っっていたし

家族が守れば特にそれ以上はいらないとクーガは常に考えていた。

「まったく欲がないねえ、あんたほどの力があれば  
パパ以上に引く手数多だろうに」

そう溜息一つつくと、弟の顔をしかたないねえと見つめる

この世界では珍しい黒髪であることを除けば

良くも悪くもクーガの外見は普通である。

クーガが戦士の村で育ったこともあり、体格はそれなりに良いが、  
単純な戦闘能力だと戦士の村では、中の下

トップクラスのリテイ達と比べると雲泥の差がある。

しかし、リテイ達は、クーガの事がなくてはならない人物と認めて  
いる。

「買いかぶりすぎだよ、リテイ姉さんや父さん達、

家族を幸せに、大切な人さえ幸せならば俺は構わないしね」

ふっと臭すぎるセリフだったかなとクーガは言ってみずがゆるくなる

しかしふとリテイを見ると何故か顔を赤くさせていた。

「あんた、わざと言っててるんじゃないだろうね」

ジト目で見るとリテイは何故かいつもの迫力に欠けていた。

「わざとって何さ、とにかく昨日は何もなかったよ」

ひらひらと手を振って、職場に戻るクーガであった。

「「ごちそうさまでしたー！！」「」

「はい、おそまつさまでした」

ミューとソーヤは揃って飯を食べ終わる

なんだかんだ八モる癖は健在のようだ。

「今日2人はどうするんだい？」

片付けながら、問いかける。

「俺は、鍛錬がてら狩りに行っってくるぜ」

「私は、バルサの町に行くつもり。美味しい甘味屋ができたって話だから」

「もちろん一番はお兄ちゃんのだけだね」

「2人ともそれぞれにいつも通りのようだ」

「さて俺はどうしようかな、試してみたい料理もあるところだけどこんな平和なときに限って、厄介事ができたりするのだから」

「きゅ、給仕長ー！！」

「一人の若い男が、食堂に駆け込んでくる」

「ほらねとクーガも慣れたものである。」

「こら、泥だらけのまま入るないつも言っているだろう」

「わ、わりい・・・けど急病人なんだ、見てもらえるか」

「村の若者がたじろぎながらも、急用であることを告げる。」

「そうか、わかった。今行くよ。」

「あとミュー、悪いんだけどゼルバ爺を呼んできてくれるか」

「簡単な救護はできるが、本格的な物だと俺じゃ対応できない。」

「うん、お兄ちゃん、行ってくるよー」

「そう言つと風のような速さで、村の奥へとミューは走り去る。」

「それだけ言つて、給仕室の奥の棚から」

「簡単な救護道具だけ持つて、出ていく」

「何も言わずソーヤが付いてきた。」

「力仕事なら手伝つと言わんばかりであったが、」

「こつちだぜ！！」

「村の入口について行くクーガとソーヤ」

「そこには、傷だらけになって倒れている人がいた。」

「これは・・・村の人じゃないね」

「見ると騎士のような高級そうな鎧を身につけていた事で一目了然だ」

った。

しかし、その鎧もところどころに矢がささり、至るところから出血している。

「ふむ、脈はあるな・・弱弱しくはあるけどね

ソーヤ、彼を仰向けにしてくれるかい」

現在、うつ伏せに倒れているままでは診察しようにもない。

「はいはい任せてくれ、そらよつとつて・・女あ!？」

ソーヤがゆっくりとひっくり返すと顔こ泥で真っ黒だが、

見間違えないほどの美少女であった。

髪がショートカットであり、体も見た目で170cmくらいはありそうだったので

一目見て女性と気付かなかった。

しかし、女性と気付いてもクーガの診察はよどみなく続く。

「ふむ、矢や、剣による裂傷が無数に、左腕が折れているな。

命に関わる傷じゃないけど、腕の固定だけはしておこうか」

そう言つて、近くに落ちてある頑丈そうな木を選び取り、

持ってきたタオルと包帯を使って固定を行う。

よどみない手つきは、クーガがかつて幾度となく応急処置を経験してきたことに由来する。

サモンシード一家は、さまざまな所に危険な任務に出ることがあり、基本クーガは、後方支援。つまり、救護係となる。

ソーヤやミューが傷だらけになつてもそれを癒すのが彼の戦場の役目となるが多かった。

「ほう、めずらしい客人じゃの。とりあえず、ワシの家まで連れてくるがいい」

そう言つて現れたのが、クーガの治療の師匠でもあり、この戦士の村唯一の医師

ゼルバ爺であった。

ゼルバ爺は元々戦士の村屈指の戦士であったのだが、現役を引退してからは、

若い者を支援するために医師の道を選んだ。

長いこと傷の絶えない生活をしてきたこともあり、診察の腕、治療の腕はかなりの物であった。

しかし、その容貌は医師というより、プロレスラーのような体に、スキンヘッドの頭

口の周りに蓄えた髭によりどう見ても堅気には見えなかった。

「お兄ちゃん、連れてきたよ」

ミューは子犬のようにキラキラした目でクーガを見上げる。

まさに褒めてほしいオーラ全開のようだ

「ありがとうな、ミュー」

そう言つて、ミューの頭を撫でてやる。

「えへへ」

ミューの顔はだらしく緩んでおり、ホントに尻尾があったら、ブルブルン振っているであろう。

「よいしょつと、兄貴、先に行つてるぜ。」

ソーヤが女騎士を担ぐとさっさとゼルバについて行ってしまう。

「おっと俺らも急がないとね」

「むゝもうちよつとしてくれてもいいのに」

といつつもピッタリ後ろを付いてくる様子は忠犬のようであるとクーガは笑ってしまった。

「さてと、処置は終わったぞ、患者はまだ寝ているがな」

処置が終わり、診察室より待合室に出てくるゼルバ

「ありがとうございます師匠。彼女の素性ですが何か手掛かりはありましたか？」

「剣と鎧じゃな、それぞれに家紋らしき文様が彫られておるからな。」  
「  
そう言つて、手に持っていた傷だらけの鎧と剣を手渡してくる。  
確かに鎧の胸辺りと剣の柄の部分に同じような花とレイピアのよう  
な剣が描かれている。」

クーガはその紋様に見覚えがある気がしたが、どうも思い出せない。  
「うーん、どこかで見覚えがあるような気がするんだけどな。」

そう言つて手を組むクーガだが、ふとソーヤがそれを手に取つた時  
「これってコーネリア産のコスムルの花じゃねえの。」

意外にも花に博識なソーヤが言う。

粗暴な外見をしているが、ソーヤは頭は悪くない。

「なるほど・・・わかつたぞ！、この紋様はコーネリア西部のサイ  
ラス辺境伯の物だ」

以前、コーネリアの依頼を受けた時に、同行した騎士が同じ紋様  
を付けていたんだ」

ソーヤのアドバイスによりようやく思い出すことができた。

「何で、サイラスの騎士がこんなところにいるんだよ？」

「おそらくは、帝国絡みじゃな、サイラス辺境伯領は」

帝国と面していることもあり、その侵攻をせき止める防波堤の役  
割を果たしておる。

それに伴い、コーネリア屈指の精鋭がそこに居るはずじゃがのう  
この様子だと・・・」

ドスンッ

その音にその場にいる全員が彼女のいる部屋の壁を見やる。

ゼルバを先頭に部屋に入ると、床に落ち、折れていない右腕で必死  
に這う女騎士の姿があった

「こおら！怪我人が無茶しちやいかん！！」

ゼルバが威圧感たっぷりにしかりつける。  
元戦士だけあって、普通の人なら震えあがるだろう

「助けてくれたことには礼を言おう。」

だが、私には使命があるんだ！行かせてくれ！！  
決死の形相で、ゼルバに食いかかる女騎士

その美しい顔も怒りと哀愁にいるどられている。

「まったく・・・とりあえず聞かせてみてくれないか？

俺らで力になれることもあるかもしれないかもさ」

そう言つてクーガが、座り込み張っている女性と同じ目線で優しく語りかける

強情な人間はとりあえず言い分を全て吐かせるに限る

その後であれば、こちらの言うことを飲み込む余裕があるのだから

「わ、わかった。焦りすぎだったかもしれない

話を聞いてくれますか」

「とりあえず、ベッドに戻ったらね」

その後、ソーヤに抱えられてベッドに戻る女騎士の姿があったそうなの

「私の名前はアゼリア」D」フォンフランク。サイラス辺境伯領の花剣騎士団第2部隊隊長を務めています。」

ひゅ〜と口笛を吹くソーヤ

茶化すなとクーガは目で抑えた。

「今から一週間前、私達が帝国国境の警備をしているときでした。

帝国が10万を超えるであろう兵力を持って攻めてきたのです。

今までは、多くても3万がいいところでしたが、本格的な侵攻が開始されたのでしよう

それに対抗するには、我が軍勢は1万強。籠城戦で時間を稼ぎ、同盟国の救援を待つことにしました

しかし、それから2日。突然帝国国境の扉が開いたのです。聞く  
と我が城の中に間者による工作でした

その期に乗じて圧倒的な物量により、わが軍が壊滅するのに時間  
はかかりませんでした・・・」

ふとそこで一言区切る。その時の悔しさをかみしめているのだろう。  
目には涙が浮かんでいる。振り切るように目を閉じると話を続ける  
「私は、お館様に命を受け、救援要請をある村・・・いや一人の人物  
に頼まなければなりません。」

これ以上は、必要以上に秘密が漏れるのを避けるためか、敢えてぼ  
かした言い方をしたようだ

しかし、おそらくその答えをそこにいる全員がほぼ悟っていた。

「それが戦士の村だったというわけですか？」

「何故知っているんですか！？どこにあるんですか！！

お願いします！！教えてください！！」

「つまりは・・・ここが戦士の村で、ここはその診療所というわけじ  
ゃよ」

その後をゼルバが紡ぐと

アゼリアはこれ以上ないほど、目を見開くと  
食いつかんばかりの勢いで頭を下げる。

「よかった・・・そうだ！お願いします！『剣神』と『心眼』に会わ  
せてください！！」

その言葉を聞き、クーガの眉がピクリと動いた

他の者たちは、あくあと溜息を付き、苦虫をすり潰したような顔を  
した。

「・・・その名はどこで？」

「だ、第一隊長のミリアリア隊長からです。

世界最高の剣士『剣神』、世界最高の智謀を持つ『心眼』2人を  
併せ持つ戦士の村は、1国を凌駕すると・・・

剣神は、戦士の村のガンドルフⅡDⅡサモンシード様であること  
は有名ですが、

それと対等な位置に『心眼』という方を褒めちぎったのですよ。サイラス領のみならず、コーネリア屈指の槍の使い手であり、めったに人を褒めたりしないミリアリア様が世界最高と申されたのです

壊滅の間際、ミリアリア様がその2人を頼れと・・

自らが殿を引き受け、私の退却する時間を稼いでくれたのです

だから！私は、その2人に会い、助力を求めねばならないのです！！」

1オクターブは下がったクーガの声に、少しひるんだが強い意志を持ってアゼリアが答える。

「はあ・・やはりミリアからか・・」

ボソツとクーガはつぶやくが、その呟きは誰にも聞こえないほどであった

「さてと、ワシから答えを言わせてもらってもよいかな」

クーガの表情を察したのかゼルバがアゼリアの懇願に答える。

「答えから言うと”NO”じゃ。我が戦士の村は基本戦争の介入を契約にて禁じておる。

つまりはこの問題に手出しはできないというわけじゃ」

「そ、そんな・・」

あまりの絶望に先ほどまで希望を見出した顔が絶望に沈む

しかし、何かに気づいたように顔を上げる

「『基本』ということは、例外があるのではないですか!？」

その言葉に一瞬言葉を詰まらせるが

「・・・条件は一つ、戦争介入する戦士は

今後戦士の村と一切の繋がりを持たぬことじゃ

つまり、村より破門。戦場でもない限り、親兄弟と会うことも・・  
「じゃな」

それこそアゼリアは絶句した。

戦士の村が歴史に出てくるのは、共通の敵

魔族の介入があつた1000年以上前に遡り、そのさいは、戦場を縦横無尽に駆け回り、魔族の殲滅に尽力する姿があつた。逆にいえば人間同士の戦いには、極力不干渉がスタンスであつただ。

その絶大な力が利用されるのを忌避するためでもある。

「あゝ掟、掟うざつてえんだよ！戦争介入するの禁じるくらいなら戦争なくしちまえばいいんじゃないかねえか！！」  
そのスタンスに反発するソーヤが息を荒げた。

「あんたねえ・・・それが簡単にできるなら軍隊いらないでしょ」「ペシツとソーヤの頭をはたく  
その身長差から背伸びして叩くことになつたが

「ソーヤ・・・さんですよ、ありがとうございます。」

ただ私達の国の問題にそこまで巻き込むわけにいきません。治療していただいただけでもありがたいです。

他の公国の統治者の方々に、危機を伝えねばなりませんので私はこれで失礼したいと思います。」

よろける体を無理におこし、部屋の隅に置いてある鎧に向かう  
「つく・・・あっ！」

足がもつれ倒れそうになるが、いつまでたつてもその衝撃は、なかった。

その体は太い男の腕、ソーヤの腕の中に収まっていた。  
アゼリアがソーヤを見上げると、決意に満ちた表情をしていた。

「兄貴・・・悪い・・・俺は、戦争を終わらせに行つてくる

死なないで済む奴が死ぬのは間違っているしな・・・」

それは、遠い記憶の中の父親を見たのか

それとも、アゼリアの姿に心ひかれたのかわからないが  
決死の覚悟を持って、ソーヤは決意した。

「アゼリア=D=フォンフランク」

「は、はい！」

いきなり、フルネームを呼ばれ畏まるアゼリア

「『剣神』 ガンダルフ=D=サモンシードが次男

『炎剣帝』 ソーヤ=サモンシード

あんたの剣として敵を討ち、盾としてあらゆる害意から守ることを誓おう」

「えっえっえっ」

先ほどまでのりりしい顔が、ポカンとして隙のある顔は可愛いじゃないかと

ソーヤは、内心思う。

「剣神の息子！？しかも『炎剣帝』ってサリファナの勇者じゃないですか！？」

サリファナの戦い。アルデバラン王国とコーネリア魔術公国の国境を跨いで横行する

大盗賊団の討伐。ソーヤの初陣でもあった。

規模は末端まで含めると5000人を超え、その殲滅のために2国からの依頼で戦士の村が動くことになった。

参戦は、ガンダルフにソーヤが付いてきた形となった。

最初は、自分勝手に動くソーヤに盗賊団はのりくらりと勢いを削ぎ一時は捕まる等、足手まとい丸出しとなったのだが、

ガンダルフに救われて、自分の力量をしり、自分を抑えチームプレーに徹することになる。

徐々に末端より、構成員を削っていき、ついに国境沿いの丘、サリファナで

盗賊団との最終決戦を迎えることになった。

その場には、ガンダルフはおらず、別働の囀にはまっけてしまっけていた。

盜賊団3000人に対し、ソーヤ達2国プラス1は500人ほど圧倒的な戦力差に、

ソーヤはとある溪谷の狭い道で、食い止め、仲間を逃がすことを決心する。

ソーヤの技は、1対多には効果が高く、一撃で多くの敵を殲滅で可能とした。

残りの兵たちが、ガンダルフ達にソーヤの危機を知らせた時には、3時間経過しており、ガンダルフが全力で向かってても1時間かかった。

適度に戦って逃げてくれよと祈りながら、戦場に向かった時、大地に立っている者はフラフラになりながら敵の大將らしきものに斬りかかる姿だった

魔術も打ち止め、体中傷だらけ、自身の炎により手が真っ黒に炭化している。

それでも、両の手で大剣を振りかぶり、完全に逃げ腰の頭領を切り裂いた。

その後、ガンダルフの姿を認め、安心したように倒れたソーヤを、それこそ

神速の早さで、村へと連れ帰り、一命を取り留めた。

その後、3000対1の圧倒的兵力差を覆したソーヤは、

尊敬と畏怖を込められて、『炎剣帝』と名付けられ、サリアナの英雄として語られることになる。

しかし、当時15歳の少年であり、戦後すぐに村で治療を受けていたせいもあり、

本当にあつたことなのか眉唾ものとして、信じない者も多かった。

それでも当時の作戦に参加した将校の間では、真実であることを知る者が多数おり、

その興奮から、それを誇張して言う者も多く

炎剣帝の名は名だけが一人歩きすることになる。  
アゼリアも当時副隊長として、話を聞いたことがあるが、  
3000人の敵を武器の一振りで燃やしつくしたただの  
性格は残忍で一人も逃さず、苦しめて殺したただの  
姿は3mを超える人間ならざる者で、ガンダルフ直属の使い魔であ  
るのだの  
聞けばそれこそ眉唾ものばかりであった。

それが、目の前にいる体こそ大きいものの、顔は童顔で  
まだ10代であるう青年であるとは信じられない。

「まあ、あんときは戦い終わってから倒れちゃって、  
次気づいたら勝手に 変な2つ名つけられて困ったけどなあ、  
あんどき逃げ出した奴もいて結局俺が倒したのは2000人くら  
いさ」

それでも単位がおかしいとアゼリアは心の中で、突っ込む。  
「俺じゃ力不足か？」

「い、いえ炎剣帝ほどの方ならこちらこそ是非  
しかし・・・私達の身勝手な戦いに巻き込むのは・・・」  
アゼリアは言い淀むのを、ソーヤは軽く拳でつつく。

「ただ俺は正しいと思うことをするだけだ。もしあんたが  
間違ったことしようとしたら、それこそ力づくで止めるしな  
何より、戦争さえ終わらせれば村には帰れる。そうだよな兄貴」  
そう言ってニヤリとクーガをみやる

「・・・はあ、その通りだよ」  
重々しくクーガが答える。確かに、戦争に伴う契約さえなければ  
ソーヤが戦い、村に戻る分には支障はないのだ。

「さてと、旅の準備でもして来ようかね、親父と姉貴にはうまく伝

えてくれや」

そう言つて、部屋をさつさと出て行くソーヤ

その場には、頭を抱えた村民とぽかんと置いてきぼりのアゼリアが残されていた。

「ソーヤめ、どうしても俺を巻き込みたいかなあ」  
そう呟くクーガは、頭を抱えるのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1648j/>

---

異世界最強家族

2010年10月10日12時59分発行